藤堂高虎・高次、川崎克・秀二……

上野城下に屋敷跡 分家初代が名張に

千石取りとなった平井家二代・陳救は、正徳三（一七一三）年に伊勢での勤務を願い出て許され、翌年、江戸から津に転居した。しかしその次の年、正徳五年には伊賀での勤めを命じられ、上野の城下町にやってくる。住まいを構えたのは徳居町だった。

福井謙二さんの著書『絵図からみた上野城』（伊賀文化産業協会発行）を開いてみよう。「享保年間城下町図」には、徳居町の廣禅寺前にあった平井隼人、つまり陳救の屋敷が記録されている。右にその一部を転載しておくが、この地図では左が北になっていて、廣禅寺の東、平井隼人の屋敷があった場所は現在、駐車スペースになっている。

陳救は上野で死去し、廣禅寺に葬られた。右の家系図では省略してあるが、その子の**陳以**も同じ屋敷で一生を過ごした。その次の代の**陳為**が寛延二（一七四九）年に津へ移っているから、平井家は三代三十四年にわたってこの城下町で生活したことになる。

以後、平井家は津に住んでお城勤めに励み、七代・**陳就**（文化七年―明治十七年／一八一〇―八四）の時代に明治維新を迎えた。

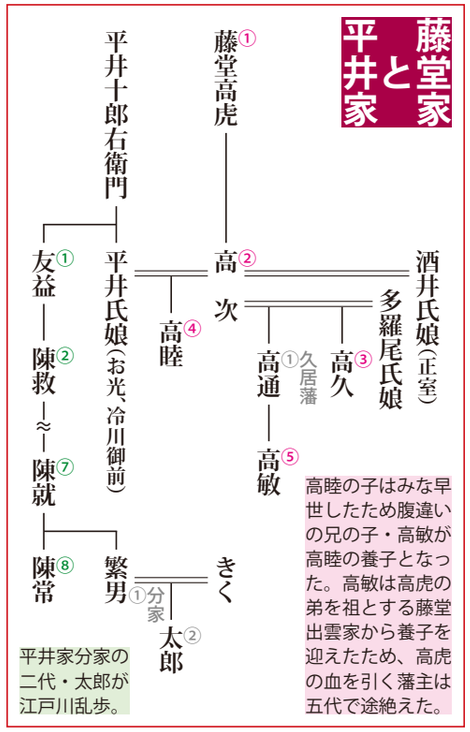
幕末の動乱期、陳就は津藩の要職に就いて重責を背負った。文久三（一八六三）年には、尊王攘夷派による天誅組騒動を鎮圧するため大和に派遣されている。上級藩士らしく藤堂家の娘を妻とし、三男四女に恵まれたが、妻は文久三年に死去してしまう。

その後、津藩の城和奉行として大和の古市に赴任したおり、陳就はある女性と知り合って後添いとした。ふたりの男の子が生まれ、**繁男**（慶応三年―大正十四年／一八六七―一九二五）と名づけられた上の子は、成人後に平井家の分家初代として独立する。

繁男は関西法律学校（関西大学の前身）に学び、卒業後も大阪にとどまっていたが、津でひとり暮らしする母親をほうっておけず、同居することを決意して名張町にあった名張郡役所に奉職した。

新町の借家に住まいを求めた繁男は、津から母を招き、明治二十六（一八九三）年七月、やはり津藩士だった本堂家から**きく**（明治十一年―昭和四十一年／一八七八―一九六六）という娘を娶った。

翌年十月に誕生した繁男ときくの長男・**太郎**が、ここでいよいよ主人公の登場となるが、のちの**江戸川乱歩**（明治二十七年―昭和四十年／一八九四―一九六五）である。



『絵図からみた上野城』に収録された享保年間城下町図の一部。徳居町の廣禅寺前に平井隼人の屋敷があった。

川崎克と知り合い 秀二の選挙を応援

乱歩誕生の翌年、明治二十八（一八九五）年六月に繁男が鈴鹿郡役所勤務となったため、平井家は亀山町に転居した。赤ん坊だった乱歩はなんの記憶もないまま生まれ故郷をあとにし、その後も名張に無縁なまま成長する。

繁男は名古屋に活躍の場を求め、実業界に転身した。平井商店を開業し、おおいに業績を伸ばしたが、明治四十五（一九一二）年、乱歩が愛知県立第五中学（瑞陵高校の前身）を卒業した直後、平井商店は破産してしまう。

乱歩は第八高等学校への進学を断念したものの、勉学への夢は断ちがたく、早稲田大学に入って苦学をつづけた。在学中にはさまざまなアルバイトを経験したが、そのひとつに「自治新聞」の編集手伝いがあった。

「自治新聞」を主宰していたのは、乱歩と同じく伊賀出身の**川崎克**（明治十三年―昭和二十四年／一八八〇―一九四九）だった。乱歩が繁男の知人から紹介されて克を訪ねたのは、大正三（一九一四）年の夏。乱歩十九歳、克三十四歳のときのことだった。

川崎克は上野城下の車坂町に生まれ、十代のころから政治家を志していた。その大望を実現すべく大正四（一九一五）年、第十二回総選挙に初出馬してみごと当選を果たした。「自治新聞」はあえなく廃刊となってしまったが、克はひきつづいて乱歩を可愛がり、大学卒業後の就職先を斡旋するなど、探偵作家としてデビューするまでなにくれとなく面倒を見た。

克は戦後、かつて陸軍関係の役職についていたことを理由に公職追放の対象とされ、選挙に出馬できなくなった。そのため昭和二十一（一九四六）年の第二十二回総選挙には、次男の**秀二**（明治四十四年―昭和五十三年／一九一一―七八）が立候補して当選した。その三年後、克は六十八歳でこの世を去った。

昭和二十七（一九五二）年の第二十五回総選挙で、秀二は乱歩に伊賀での応援演説を依頼した。学生時代、川崎家に出入りして秀二の遊び相手を務めたこともあった乱歩は快諾し、九月二十六日に名張入りすると、平尾の宇流冨志禰神社で満員の聴衆に熱弁をふるった。夜には、鍛冶町の料理旅館・清風亭で地元の有力者と宴席を囲み、そのまま生まれ故郷に一泊した。

翌日、乱歩は本町で書店を経営していた**岡村繁次郎**らに案内され、新町の生家跡を訪れた。有志が浄財を集め、生家跡に江戸川乱歩生誕地碑が建立されたのは昭和三十（一九五五）年のことである。

伊賀出身の代議士・川崎克。学生時代に克と知り合った乱歩は生涯にわたって克を恩人として慕いつづけ、克の没後に出版された『川崎克伝』では編纂委員長を務めた。

郷土ゆかりの人物でたどる……

じえじえじえ！ あの人も関係者？

江戸川乱歩と伊賀

探偵作家の江戸川乱歩は明治二十七（一八九四）年、旧名張町の新町で生まれた。ということは、全国的にはほとんど知られていないが、ここ伊賀地域では周知の事実だといっていいだろう。

だが、周知なのはそこまでだ。乱歩と伊賀の関係となると、地元でもまったく知られていないのが現状である。そこでこのページでは、乱歩と伊賀とのかかわりを、郷土ゆかりの人物を手がかりとしてたどってみることにしたい。

藤堂高次が熱海で見つけた冷川御前

伊賀の近世は藤堂高虎（弘治二年―寛永七年／一五五六―一六三〇）に始まる。近江の国に生まれ、戦国武将として勇名を馳せたあと、外様大名ながら徳川家康の腹心として幕藩体制の確立に尽力した高虎こそ、江戸時代を通じて伊賀・伊勢両国を治めた津藩藤堂家の輝ける始祖である。

だが、そういった歴史的事実は乱歩には関係ない。関係があるのは、父・高虎の死を受けて二代藩主となった**藤堂高次**（慶長六年―延宝四年／一六〇二―七六）だ。左の家系図でいえば、①から②へ藩主の座が継承されたことになる。以下、家系図を参照しながらお読みいただきたい。

津藩の殿様となった高次、いつのことかはさだかではないが、江戸から熱海へ療治の足を伸ばした。つれづれなるままに湯治場の周辺を散策するうち、川のほとりで洗濯しているひとりの娘が目にとまった。高次はその娘が気に入り、ただちに側室、つまりお妾さんにしてしまった。

娘の名は、**お光**。伊豆伊東の郷士・平井家から出て熱海で奉公している身だった。側室となったお光は、冷川という土地の出身だったことから**冷川御前**（寛永三年―宝永四年／一六二六―一七〇七）と呼ばれるようになった。

津藩の歴史を記した『宗国史』には、冷川御前となったお光が「嬖人平井氏」として記録されている。嬖人は殿様のお気に入りという意味だ。冷川御前を可愛がった高次は寛文九（一六六九）年に隠居し、長男・**高久**（寛永十五年―元禄十六年／一六三八―一七〇三）が跡を継ぐ。

同じく寛文九年、伊豆の平井家では、冷川御前の弟が藤堂家に召し抱えられた。高次が引退を機に、冷川御前の弟を家臣に引き立ててやったと見るべきだろう。弟は**平井友益**（？―天和二年／？―一六八二）という名前だった。

友益は高次の鍼医として津藩の江戸屋敷に勤務した。微禄の下級藩士で、江戸詰めのまま姉の冷川御前より早く死去し、家督は子の**陳救**（？―享保十八年／？―一七三三）が相続した。平井家の家系図では友益が初代とされているが、二代・陳救も江戸に住んで津藩に勤めた。

藩主になった高睦 出世をとげた陳救

冷川御前は高次とのあいだに一男一女を儲けた。男の子が**高睦**（寛文七年―宝永五年／一六六七―一七〇八）だ。兄で三代藩主だった高久に子供がなかったため、高睦はその養子となり、元禄十六（一七〇三）年、高久が死去すると四代藩主の座についた。

伊豆の郷士の娘が藤堂高虎の孫・高睦を生み、その高睦が津藩の藩主になったのだから、冷川御前の出世物語は江戸時代版シンデレラ・ストーリーと呼んでいいだろう。

冷川御前が死去した宝永四（一七〇七）年、平井家の当主だった陳救は破格の出世をとげる。それまでにもわずかずつながら俸禄を加えられていたが、この年には一気に八百石を加増され、禄高千石ということになった。

千石取りといえば堂々たる上級藩士、会社員なら重役クラスだ。しかもこの年、陳救は主君の高睦から隼人という名前まで贈られている。

ただし、主君といっても高睦は陳救のいとこである。亡き母親を追慕した高睦が、血縁にあたる陳救を厚遇することで冷川御前の冥福を祈ったものと考えられる。